

序文

青柳悦子

本書は文学・文化テクストをめぐる最新の研究論文二十篇を集めた論集である。いずれもアクチュアルな問題意識に立ち、文学・文化研究のこれからを切り拓いていく意欲に駆動された論文であり、読者のみなさまには響き合う多様な啓発力をここに見出していただけのことと思う。

各論考は、各々の執筆者が現在取り組んでいる独創的な研究課題を論文化したもので、全体としてのテーマ的な統一性はないものの、むしろ文学・文化研究の現在と今後の展望を読者が関知できる内容となっている。純文学作品のみならず大衆小説や児童文学、またマンガ、映画、演劇、テレビドラマなどさまざまな文化ジャンルの作品が議論の対象とされており、しかも具体的な素材は意外性に富むものが多い。

時代や地域を横断した広がりを持ち、多彩な方向性を特徴とするこの論集を括る緩やかなガイドとして、本書は四部立ての構成をとっている。とはいえ実際には各論考が、この枠組みを超えて深く共鳴し合い、網の目状の連関を形成しながら研究領域と問題設定を共有している。お目当ての著者・論文に導かれて本書を手取る読者も多いであろうが、ぜひ思いつくままに他の論文にも手を伸ばして議論の呼応を楽しんでいただきたい。

第一部「翻訳と翻案、メディアミックスの多層性」では、広い意味での翻訳や、ジャンル・文化圏の越境現象に関

わる論が集められている。冒頭の江口真規氏の論考は、『動物研究』・エコクリティシズムの知見を深めてきた氏がこの問題意識を生かして「朝ドラ」の『なつぞら』をとりあげつつ、アニメ制作現場の表象をめぐる問題にも切り込んでいく。本書の目玉として、日本の比較文学研究をリードする加藤百合氏・平石典子氏の最新の研究を読むことができるのも嬉しい。加藤氏は、ソビエト連邦における児童文学出版の成立・制度化の過程を『ドリトル先生』ものの移入に着目しながら明らかにする。平石氏はドストエフスキーの『罪と罰』が日本において海外文学のマンガ翻案の特権的な対象となってきたことを実証的に跡付けながら、卓越した作品分析によって翻案マンガ研究の範を示す。一方、『角川アイドル映画』というカテゴリーを映画史において注目すべき対象として焦点化した金普慶氏の論は、映画という枠組みを超えた大規模経済活動としての〈映画産業〉の傑出した事例としてこれを解析して、新たな研究領野を確実に示して見せている。さらに、ヒーリングをキーワードとして韓国から日本への小説やエッセイの移入がブームとなっている近年の現象を分析する梁智英氏の論も、文化圏の横断への関心に基いている。

本書の多くの研究がジェンダーやエスニシティに関わる問題意識を有しているが、第二部「人種・ジェンダー表象の再編」にまとめられた論考は、とりわけこうした観点に貫かれている。松田幸子氏の論は十八世紀末にシェイクスピア劇を演じる女優として英国で活躍したサラ・シドンをとりあげ、特異な触媒としてシェイクスピア崇拜の醸成に寄与したこの女性アーティストを通じて私たちのさまざまな盲点に気づかせてくれる。ポストコロナリアル研究の専門家である吉原ゆかり氏がスピルバーグ監督の二〇二一年の映画『ウエスト・サイド・ストーリー』を論じた研究は、エスニシティとジェンダーに由来するひずみに対する視点をこのリメイク作品から抉出してスリリングな議論を展開する。トルコで日本語・日本文化教育にたずさわるチェリッキ・メレキ氏が、人気作家桜庭一樹の『赤朽葉家の伝説』を日本の歴史そのものを大陸との複雑な関係の上に置き直す問題作として詳細に検討した論は、日本をめぐるビジョンを更新する必要性を世界の日本研究者が強く感じていることを示した例として興味深い。三島文学を女性登場人物から捉える李佳炫氏は、戦後以来の日本社会における天皇観に再考を促しつつ近代日本の家族観をこの作家を通じて問い直す。洪潤杓氏の論は、一見凡庸な作品に思われる二〇〇六年公開の映画『嫌われ松子の一生』から、屈折を繰り返す女性主人公を通じて、昭和後期から平成にかけての日本人の心性の変遷を発見的に抽出し、現代日本を批

判的にまなざす視座を提供する。

第三部「帝国の残響と災厄の記憶」は、植民地支配の歴史を経て戦争や大災害などの危機に立つ世界と日本の情勢を省察し、社会と文化の關係に新たな視線を注ぐ論文を集めている。李正旭氏の論は、左翼演劇人として知られる村山知義が終戦直前から直後にかけておこなった朝鮮滞在について、前後の事情とともにつまびらかにしようとする試みで、支配／被支配の境界上に立とうとする文化人の模索をあぶりだす。また黄益九氏の論者は、いまだ十分な解明の進んでいない終戦後の引揚者をめぐる実態について丹念な検証作業をおこない、特にソビエトからの帰還者をめぐる問題のありかを明示していく。一方、英文学研究者の齋藤一氏は、戦争という大災厄と向き合おうとする文学としてヴァージニア・ウルフの『灯台へ』に目を向け直したうえで日本の原爆文学者竹西寛子の作品を論じ、核の脅威下にある現代人の危機意識を喚起する。徐東周氏は、日本人を熱狂させた映画ゴジラ・シリーズの中でも一九五八年の第一作に注目しながら、その後のゴジラ映画の変遷を通じて、日本社会の底流を成してきた戦争・冷戦に対する暗黙の認識を浮かび上がらせる。マンガ研究者の杉本章吾氏は、東日本大震災を契機に創作されたマンガ作品群を概観しつつ、ノンフィクションの震災記録マンガに見られる特質を注視して、表象文化創出に関する新たな問題提起をおこなう。

第四部「テキストの生成と知の編成」では抽象度の高い議論を特徴とする論者が集められ、学術的伝統そのもののへの問い直しが果敢に試みられている。古今東西の文献に通じた秋山学氏の論考は、古くから日本に伝来し流布した大乘仏教の經典「金光明經」をめぐって精緻な解説をおこなった上で、壮大な比較宗教学的議論を展開する。理念的研究である金谷壮太氏のロラン・バルト論は、この文芸思想家の著作の中でも洒落な論述で知られる『テキストの快楽』が、構造主義時代と変わらず、抽象的概念構造が生み出す人間の思考のメカニズムへの関心に貫かれたものであったことを明らかにする。また転向文学を研究してきた李珠姫氏は、その梓を朝鮮半島の作家金南天の朝鮮語作品にまで広げ、日本占領下の被支配者側の作家の苦悩と屈折した気概とを読み込んで、このジャンルそのものを拡張する。本書を締めくくる二つの論文は、科学と文化・芸術の關係をテーマとする論考である。科学／疑似科学と文学の關係を探究している区小勤氏は、大正期に科学雑誌を創刊して「科学小説」を熱心に掲載した科学ジャーナリスト原田三

夫をとりあげるとともに、翻訳紹介された作品から科学言説の時代を生きる人々の姿を切りとって見せる。金牡丹氏はチェーホフの『三人姉妹』の登場人物の一人をアンドロイドに置き換えた平田オリザの実験的な演劇作品の意義を掘り下げ、これをきわめて「人間的」でアクチュアルな課題である「ケア」という観点に結び付けて論じることで、人間と人間ならざるものとの境界越境の中で今日の先端的な創作が私たちに差し出している問いを抉り出す。

総じて本書は、対象とする文学・文化テクストの固有性を深く読み込みつつ、それを社会の動態的なあり方と深く交響するものとして考究する諸研究から成っている。またテクストそのものを本来的に変容に開かれたものと捉えることも共通の立脚点である。こうした探究姿勢を支えているのは、研究基盤そのものの変革を怖れない冒険的な覚悟であり、それが新機軸の研究方向を生み出していくのである。

本書の執筆者の多くは、筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻（五年一貫制博士課程）総合文学領域の修了者で現在国内外の大学で教員として活躍している中堅・若手の研究者、および何らかのかたちで同領域に関係する筑波大学教員たちである。本書の各論文が多様性を極めながらも実に多くの呼応を見せ、その中から大きく人文学研究の現在というものを浮かび上がらせているのは、この総合文学領域での長年にわたる忌憚のない研究交流の積み重ねが背景にある。私自身もその交流の中で、たえず知的な触発を受け、学究活動の深遠さと厳しさに畏敬の念を高めながら相互に刺激し合う楽しみを享受してきた。この伝統は、組織改編後も幸い受け継がれて今日に至っている。

本書は私の筑波大学定年退職を契機に企画されたものである。寄稿してくださったすべての執筆者の方々、そして最終的に本書に収められることにはならなかったものの、準備過程での勉強会に参加したり投稿を準備して下さった方々に心から御礼申し上げたい。研究は孤独だが、その孤独な研究こそ最も熱く親密な対話の契機であることを、みなさんのおかげで私は経験し続けることができた。

最後に、大変な苦勞を重ねて本書を完成にまで導いた編集担当の杉本章吾氏と江口真規氏に格別の感謝を捧げる。また、的確な助言と采配で、私たちを助けてくださった水声社編集部の中村希生氏に心からの御礼を申し上げます。